弘法大師善通寺掲額説話の周辺：大師名筆伝説の行方(その二)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邉, 昭五 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1435

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

弘法大師善通寺掲額説話の周辺

――大師名筆伝説の行方（その二）――

渡邉昭五

一、はじめに

本稿は、前稿の「弘法大師名筆伝説の行方」（本誌二七号所収・平8）に、続くものである。

前稿において、伝記に載る大師名筆伝説には、（1）五筆勅号（宮中壁字）・（2）虚空書字・（3）大内書額（弘法抛筆）・（4）流水点字・（5）隔河書額・（6）善通寺額事・（7）皇嘉門額事・（8）天地合三字などの、八つほど大師の名筆にまつわる伝説のあることを述べた。そのうち、（6）善通寺額事の以外は、凡て写実性の薄い奇瑞奇蹟譚である…、と述べた。善通寺の額を書したとする（6）の説話のみ、写実性を具えた、いかにも歴史上の事実にあったような唯一の伝記伝承である。

この写実性についての、真偽その他を本稿で論じることにする。

*

弘法大師の伝記は、その伝説を含めて、代々の真言僧や蓮華谷聖の手によって幾たびか増補改删されてきた。さらにこれらの幾つかの説話は、民間口碑の分野に滲出して、さらに枝葉を拡げてきたものである。また口碑から採り入れられたものも少なくなかったろう。その種類と数は非常に多く、口碑の自然説明伝説においては、大師はその主人公のナンバー

ワンである。

そして、「弘法清水」とか「再栗（ふたたびぐり）」や「三度柿」などの、水と救荒食物の救済者としての大師の影像は、主として中近世の時宗念仏系の性格を具える高野聖の手によって形態を整えてきたであろうことは、以前に詳しく論じた(注1)。また、稲荷信仰との関係から、稲荷翁との邂逅譚も、大師伝記の「高野尋入」の説話から条枝化した東寺稲荷祭起源縁起譚として膾炙された、ということも述べた(注2)。

本稿では、大師の生誕地とされる善通寺の掲額説話の周辺を論じながら、彼の名筆伝説との関連や、その伝承性に言及してみたい、と考える。

二、善通寺とその創建諸説の周辺

善通寺は、香川県善通寺市善通寺町にある。真言宗善通寺派の総本山で、五岳山屏風浦誕生院の山号を持つ。本尊は薬師如来で、四国霊場八十八所の第七十五番札所である。五岳山の山号は寺の背後に、香色山・筆の山・我拝師山・中山・火上山の五峰が聳えているところからの由来である。

善通寺の創建については、後述する多くの弘法大師伝記が、大師の創立であることを伝えているが、あくまでもそれは伝説であって大師の生誕地である当地であったがために、後代になって寺側の方から、大師創建に結びついていったものであろうか…と私は考える。実際に、寺の創建については、不明である。善通寺に限らず、信仰の起源や発生が、一つの事象に定められない多元的性格を具えている以上、それを何年と一つの年に定めるのは無理があるように、善通寺の成立も茅屋時代の信仰から大伽藍を構えるまで、何度か改築増築新築は繰り返されたのであろうから、その創建をどの改築期にあてはめればいいか…で異なってこよう。信仰という心象史に一定の年を、発祥とあてはめられないのと同様に、創建

も「ほぼ何々ごろ」とするより他はない。ただ、大師生誕地以前から善通寺は存在していたらしいことは、奈良期の出土品その他から充分に考えられるところである。

『善通寺市史』第一巻(注3)所引の『香川叢書』などによれば、江戸中期の同寺の僧の著による『多度郡屏風浦善通寺之記』では、大師生誕と同寺創建を密着して記している。大師の父である讃岐領主の佐伯田公（善通）と阿刀氏の妹との玉依御前の二男として、大師は同寺の御影堂のある地で生まれたとし、大師は唐の留学の終った大同二年（八〇一）に、勅許を得て故郷に佐伯氏の氏寺建立を計画し、彼の唐の恩師であった恵果のいた長安の青竜寺を真似て、六年の歳月を要して弘仁四年（八一三）に完成、寺号を父の法名をとって善通寺と命名した、と伝えている。また、寛仁二年（一〇一八）の善通寺権別当僧政安の解状に、〈抑件寺為弘法大師御建立云々〉とあり、平安期には大師創建説が通常であったらしいことを、推察せしめる。宝治三年（一二四九）の庁宣にも、〈右当寺者弘法大師草創国中無雙之精舎也〉と、記されている。

この大師創建説に対しての、父の佐伯善通創建説というのは、承元三年（一二〇九）八月付讃岐国司庁宣に、〈彼寺者弘法大師降誕之霊地、佐伯善通建立之道場也（『善通寺文書』『新編香川叢書』）〉とあることや、弘安四年（一二八一）の左弁官符にも〈当寺者功徳大領善通之建立弘法大師誕生之霊地也〉とあることに拠っている。

この二者の折衷ともいうべき、佐伯氏先祖建立プラス大師修造説というのもある。延久四年（一〇七二）正月の讃岐国善通寺所司等解には、〈…件寺者弘法大師御先祖建立の道場、大師聖霊誕生之砌也（『平安遺文』一〇七二）〉とあるし、長寛二年（一一六四）の東寺文書に、〈所司等僂検案内、善通寺者是大師先祖之伽藍建立之後致五百余歳〉と、記されている。また、高野山の学僧の道範が仁治四年（一二四三）に記した『南海流浪記』には、〈抑善通之寺は大師御先祖俗名を即為寺号云々、破壊之間大師修造建立之時不被改本号にて〉とある。そのほか、後述する諸種の弘法大師の伝記にも、主題の掲額説話に因んでの大師建立の伝説を謳ったものは多い。例えば、第三節の資料（1)(2)(9)(8)(11)(12）などである

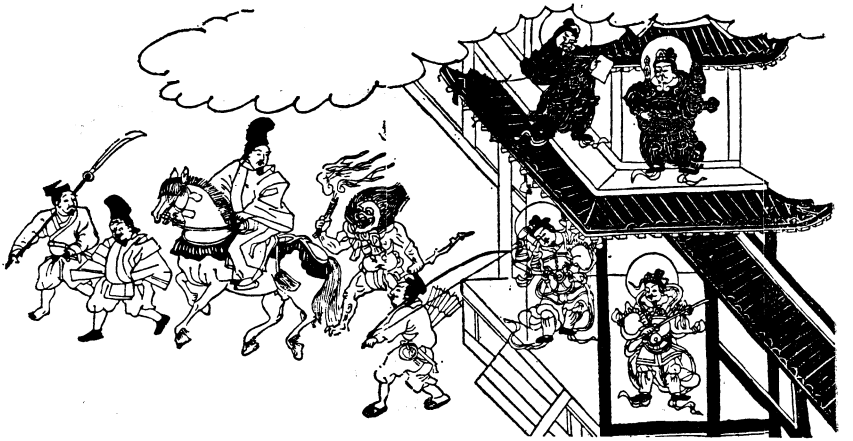
（三六～三九ページ参照）

しかし、これらの大師建立説・佐伯善通建立説・大師修造の折衷説などなど、何れの資料を一瞥してみても、大師在世中に記されたものは皆無で、凡そは入寂の承和二年（八三五）から二〇〇年前後の歳月を経て記録されたものばかりである、ということだ。その点では、何れの資料も二世紀以上の口碑を経た、半ば伝説化された内容ということになる。そんなことから鑑みれば、大師修造の折衷説あたりが、もっとも穏当ということになろう。

また、善通寺管長蓮生善隆師は、「現在の善通寺の東院には白鳳期（六七二前後）建立の佐伯氏の氏寺があった」といわれていること(注3)に併せて、大師誕生以前に奈良時代の国分寺以外に各地方の豪族たちがおのおの自己の氏寺を建立していたことは充分に考えられるし、佐和隆研も〈…佐伯氏がその領地内に早くから一寺を建立していたとみることは不自然ではない〉と、『空海の軌跡』において述べていること、寺内境内より奈良期の瓦が出土していることなどなどを、傍証として考えれば、古く佐伯氏の氏寺として小規模ながら建立されてきたものが、規模を徐々に大きくして、今日の善通寺に発展した、と考えることが、もっとも穏当であろう。少くとも真言宗の開祖としての大師の晩年の九世紀初期には、大師の中央政界への参与とその高名に伴われて、故郷の善通寺は急速に大規模化されたことは、推察されるところである。

三、大師伝における善通寺掲額説話

弘法大師の伝記は、『弘法大師伝全集』（昭10・ピタカ）によれば、九十三種の多きを数え、歴代の真言僧の書承を積み重ね、手を経るごとに少しずつ膨脹してきたことは、第一節の序に簡単に上述した如くである。大師伝記にもりこまれた多くの説話の中で、その一つに当たる善通寺掲額説話及び大師と善通寺の関係を記した一条が、どのような性格か、まずその内



挿図説明：『高野大師行状図画』十巻本に描かれた「善通寺額事」の絵。善通寺曼荼羅院の額の下を通過して行く安倍晴清の一行

容を一覧してみたい。

例文として、多くの歴代伝記の中の『高野大師行状図画』十巻本の該当箇所「善通寺額事」を、まず挙げておく。

（A）善通寺額事　大師御生所。讃岐国屏風の浦に、善通寺曼荼羅院とて、大師結始の伽藍有。彼額は大師則書給へり。昔陰陽師清明、事の縁有て、彼国へ下向の時、夜道を行に、相ぐしたる使鬼神、火をともしたりけるが、善通寺の前を過る時、火をうちけちてみへず、寺を過て後出来たり。清明勘発しければ。此寺の額は四天守護し給ふが故に、をそれをなして、みちをかへたるとぞ申ける。

非常に、他説話と比べて簡単な条となっている。『高野大師行状図画』十巻本は、歴代伝記の中では、中世期に成立したものとして、絵を伴なっていて、同じ絵を伴う『弘法大師行状記（行状絵詞）』とともに、凡その説話を網羅している。もっとも整った大師伝記として、他本との比較対照にしやすいこともあって、本伝記を例に挙げたが、この掲額説話は『弘法大師行状記』には記されていないのである。

…ということは、大師伝記の中にあって、善通寺掲額説話はさしたる重要な説話ではなく、あってもなくてもよかった程度の伝承ということになろう。換言すれば、後代になるほどに添加増補によって数を増してゆく伝記中の説話の中にあって、必らず伝記中に語られねばならなかっ

挿図説明：『高野大師行状図画』の十巻本の巻六に描かれた「釈尊出現」の絵。大師の我拝師山にて修行中に、釈迦が湧現した…、という説話にもとづいている。

た説話に比べて、さほど重きになしていなかったことになる。添加される説話は、当代人においては、今日の如く虚像とか、真偽云々として捉えられるものではなく、すべて在世中の事実として実像として捉えられているのである。その点、この掲額伝承は、多分に大師生誕の地ということから連想され、創作されて伝記の中に組み入れられた、と考えられる。そのことは、前節の大師の善通寺創建説の年代とともに、後述の大師伝記の掲額説話の初出時代とを照合してゆけば、解明される性格のものである（後述）。

もう一つ、善通寺に関係ある説話として、善通寺の裏側に連なる五岳山の一峯である我拝師山の命名の由来となった、大師がその師である釈尊に邂逅したという伝説をもとにした説話の「釈迦出現」もしくは「釈尊湧現」の説話があるので、善通寺関連説話として挙げておく。

（B）釈尊出現事　さぬきの国、屏風の浦は、大師の御生所也。彼所の山のかたち。屏風を立たるがごとし。此ゆへに屏風の浦と名付。大師爰にして、をこなはせ給ひしに、孤峯のうへ、片雲の中に、釈迦如来形をあらはして、影向し給ひき。大師歓喜のあまりに、みづから其御ありさまを

書留て、今に彼所にをかせ給へり。此山を其後我拝師山（ガイシザン）共名付。又は涌出のだけとも名付といへり。

これらの（A）（B）は、『高野大師行状図画』十巻本においては、巻六に（巻六は同書において、もっとも挿入説話の多い箇所となっている）、「讃州剣山」という大師が金剛蔵王に対面する段を挾んで、（B）――「讃州剣山」――（A）の順序に配置されている。すなわち、大師出生地の讃岐周辺の関連伝承を一まとめに、このくだりに書き記した感がある。そこで、（A）（B）の善通寺及びその関連説話の釈尊邂逅譚の内容を鑑みてみよう。

（A）については、『――行状図画』十巻本の説話の内容も、大師の名筆伝説の有名な「五筆勅号」「虚空書字」「大内掲額（弘法抛筆）」などの、重要な説話に伴われて派生した感を与えられる内容であって、事実としても大師においては書いても書かれなくてもよい出来事であろう。（書を依頼されて書いたとか、額を書いたとか…名筆家ならそんな出来事は、大師に限らず誰でも多くあったことであろうから…）。さらに、その後半に添付された陰陽師の安倍晴明についても、その因縁は後代に創作されやすい性格を具えている。そもそも、彼は平安中期の陰陽師で占い師及び天文学者ということだから、当代では誰もできないような三桁の掛け算や割り算などを始め平方根などの程度の数学をよくして、尊敬された人物だったのだろう。その実像もはっきりせず、生没年も延喜一九年？（九一九）～寛弘二年（一〇〇五）であるから、大師示寂（八三五）より約百年ほど後代の人間ということになる。ただ、この『――行状図画』の登場する中世では、伝説化された知名人で、『古今著聞集』では沢山の瓜の中から毒のあるそれを選び出したり、『古事談』では花山院の頭の骨を祀らせて天皇の頭痛を治癒させたり、『今昔物語集』では術を以てガマを真っ平らに押し潰したりしている。それだけの著名人を、大師伝記は見逃さずに伝記に採り入れることによって、大師のさらに偉大であったことを語ろうとしている。大師伝記は、そうでなくとも当代の信仰の対象となる著名人（人ばかりでなく如来も菩薩も含めて）は、すべて邂逅できているのであって、それも後代の伝記になるほどにこの邂逅奇瑞譚は多くなってくるのである。その代表的例話が、次に述べる（B）であろう。

（B）については、もっとも「我拝師山」命名の由来譚であるから、釈尊と邂逅するのは他の地でもよいわけでその点では、善通寺に関連して、ついでに語られたとでもいうべき、地もとの伝説が伝記中に採り入れられた、と考えられる。そうでなくとも、上述の如く、著名人や著名な菩薩との邂逅譚など、大師伝に多いという例は、釈尊に限らず、その対象となった人仏名を『――行状図画』のみに限って、列挙してみても、大師の伝記中の偉大さが知れる。例えば、石淵の勤操（聞持受法）・文珠（虚空書字）・釈尊（渡天見仏）・聖徳太子（参詣御廟）・伝教大師（高雄灌頂）・八幡大菩薩（八幡約諾）・稲荷翁（稲荷契約）・釈尊（B――釈尊出現）・金剛蔵王（讃州劔山）・役行者（大峯修行）・丹生明神（丹生託宣）などなど仮空の仏神名を加えても、相当に幅広い方々を網羅している。しかも、釈尊は「渡天見仏」にもあり重複ということになる。安倍晴明の因縁も、その中の一人に加えられたことは、この説話の新しいことを証している。同じ邂逅因縁人を『弘法大師行状記』の方に、眼を向けてみても、ほぼ類似した奇瑞譚が多い。例えば、石淵の勤操（出家学法）・釈迦（釈迦湧現――我拝師山の命名由来――Bに同じ）・三蔵大師（梵僧授経）・伝教大師（伝教灌頂）・稲荷翁（稲荷来影）などなどであって『――行状図画』と比べても、安倍晴明との因縁譚があるかないか…の程度の違いであることに、本文の（A）善通寺掲額説話の、伝記中にさほど重要視されていなかったことが、理会できるであろう。

※

むしろ、善通寺は大師の生誕地にあった、ということから大師の有名化に伴って、大師との因縁が濃くなった、といえる。その掲額説話も、弘法大師の名筆家であることの有名化、それに伴う口碑の拡がりや伝記における名筆伝説（五筆勅号や流水点字など、その他）に影響されて、後に添加された、という印象を抱かしめる。それは大師伝記が、大師のその他の叙事伝説々話を増補添加してくる傾向からもわかることである。このことを、具体的に鑑みるためにも、大師伝記中の善通寺のみに関連する記事を年代順に逐一拾ってみると、次の如くである。

（1）高野大師御広伝（下）……元永元年（一一一八）成立

帰朝之後、手自造数仏像。又於先祖建立造善通寺書額。讃岐国建立善通曼荼羅両寺止住練行。尤多聖迹。彼寺山有塩峰。土俗伝云、大師埋七宝期三会也。後世訛曰塩。其地有経行之迹、草木無生。海端有一石、在石上欲墜不墜。号念願石。俗又伝云、大師遺法滅時此石可墜矣。

（2）弘法大師行化記……承久元年（一二一九）成立

大師先祖於讃岐国建立善通寺。額有精霊。陰陽師晴明有事縁、下向讃岐国。以識神燈火。暗夜過彼寺前。識神滅火不見。過寺之後更出来。於此晴明令勘発。識神曰、弘法大師書此寺額。四天王守護之。仍成怖畏所復道也云々世俗語伝也

（3）弘法大師略頌鈔……文暦元年（一二三四）成立

讃岐国善通寺、曼荼羅寺。此両寺、善通寺、先祖氏寺。又曼荼羅寺、大師建立。皆有御住房。

（4）弘法大師伝要文抄……建長三年（一二五一）成立

又云、善通曼荼羅両寺白檀薬師如来像者、欲渡唐之時、為祈風波、手所操斤斧也。

（5）高野大師住処記……嘉元元年（一三〇三）写

善通寺　讃岐国也、先祖氏寺也。

曼荼羅寺　讃岐国大師御建立寺也。両寺皆有大師住房、

（6）弘法大師行状要集……応安七年（一三七四）成立

或記云、善通寺曼陀羅寺、白檀薬師如来像者、欲渡海之時、為風波手所操斧也云々。

私云、伝教大師入唐之時、於鎮西為除風波之難、奉造薬師像之由載伝記、両大師同帰薬師如来、凝渡海之祈願、祖意可察者歟、

（7）高野大師行化雑集……？　（一六三〇？）

善通寺上座所見御筆文云

讃州受生以知一切衆生讃嘆、多度郡垂レ跡以知三有諸趣多度也、依二伝言一書レ之、逐可レ尋二勘之一

(8) 〃 ……〃 〃

善通曼荼羅両寺白檀薬師如来像者、欲二唐渡一之時、為レ祈二風波一、所レ操二斤斧一也

讃州多度郡之内、字号二吉原一、中郷中建二立善通寺一、又中郷者大師御桑梓之地也。或於二吉原郷一、建二立曼荼羅寺一、大師之建立也。此寺南面有二五岳山一、第一称二高識山、第二五筆山、第三我拝師山。此山麓有レ寺、号二出釈迦寺一。善通寺曼荼羅寺并中郷吉原等連綿而一所之地也。第四火上山、第五獅子山、此五山之浦名二屏風浦一也

(9) 続弘法大師年譜(巻六)……天保十一年(一八四〇)

行遍僧都行化記述云、讃州多度郡之内号二字吉原中郷一。中建二立善通寺一。又中郷者大師御桑梓之地也。或於二吉原郷一建二立曼荼羅寺一、此寺南面五岳、東一称二高祓山一、第二云二筆山一(私注「五」ナシ)、第三云二我拝師山一。此山之麓有レ寺号二施坂寺一。□善通寺曼荼羅寺并中郷吉原綿連而一処之地。以二此五山之浦一名二屏風浦一。

……(中略)……広伝云、又於二先祖建立造善通寺一書レ額。讃岐国建立善通寺曼荼羅寺両寺一。止住練行尤聖迹多。彼寺山有二塩峰一。土俗伝云、大師理二七宝一期二三会一也。後世訛曰二塩峰一、其地有二経行之迹一。草木無レ生。海端有二一石一。在二石上一、欲レ墜不レ墜号二念願石一、……(以下略)……

(10) 〃 (巻八)…… 〃 (〃)

……(略…ほゞ2に同じ)……

(11) 開山伝譜(第四) ……天保十年 (一八三九)

讃州多度の郡の内吉原中郷の中に善通寺を建立す。中郷は即大師御桑梓の地なり。又吉原郷に大師御建立の曼荼羅寺あり。……(略…ほゞ8・9に同じ)……

大師この山（私注「五岳」）に止住練行し給ふ時、孤峰の上片雲の中に釈迦世尊出現し給ふ。歓喜の余り、自ら其出現の様を図し置かる。其時より此を我拝師山とも湧出の岳とも号す。又此辺大師の聖迹多し。彼寺の山に塩峰と云あり。……（以下略、ほゞ9に同じ）……

(12)　〃　……　〃　（〃）

讃岐の国善通寺の額は祖筆にして精霊あり。昔陰陽師晴明かの国に下向し、夜道に相ぐしたる使鬼神火をともしけるが門前を過る時火を打消て見へず。寺を過て後出来りぬ。晴明勘発しければ、此寺の額は四天王守護し給ふがゆへ怖畏し道をかへたるぞと申けり御伝、深賢記、行状図絵

	モチーフ	記事
ア	大師自ら善通寺の額を書す	1 2 9 10 11
ア'	大師善通寺建立。額に精霊あって晴明、道を変える。	2 12
イ	善通寺曼荼羅両寺、建立す。	1 8 9 11
イ'	曼荼羅寺は、大師の建立にして住房あり	3 5
ウ	善通寺曼荼羅寺の薬師如来像は大師の彫りしもの	4 6 8
エ	塩峰に七宝を埋め三会を期す	1 9
オ	塩峰海端に大師経行の念願石あり	1 9
カ	我師拝山の名義由来は釈迦湧現の地よりなり	8 11

以上(1)〜(12)の抽出記事は、九十三種の大師伝記のものであるが、書承による類型的な記述が多い。しかも善通寺周

辺の関連説話は(1)の伝承による一一一八年以前より古いものはなく、大師伝記中の説話としては非常に新しい一類といえることになる。特に、近世以降の(9)〜(12)は全く表現から文章まで、前代書承伝記に重なっていて、(特に12などは上述の本稿のテーマである、代表例としての『高野大師行状図画』の「善通寺額事」と同じである)、参考にもならぬので、その記述の存在だけを示して「中略」「以下略」を多くした。

これらの類型的記事をモチーフ別に、概ね分類してみると、前頁の表の如くなろう。上述の『高野大師行状図画』の一節は、(ア)(ア')(イ)を併存しているといえる。

そもそも、(1)の伝記伝説が伝承による元永元年(一一一八)の成立で、大師入寂後二百八十四年という長い歳月を経ていることに、善通寺説話の初出が新しいことを感じさせる。他の多くの伝記伝承説話が殆ど、有名なものは入寂後五十年前後に登場していたのであるから、善通寺掲額説話は、後世の創作性をより濃くした伝記説話といえるのである。さらに、この善通寺に関連した種々の伝承(ア)〜(カ)が、その初出である(1)より時を経るごとに、類型の枠にはまりながらも、書承によって少しずつ枝葉を拡げていっていることがわかる(これは大師伝記説話の何れもが同じような傾向をたどっている)。

例えば、(1)において、帰朝後に〈手ヅカラ数(多)ノ仏像ヲ造〉ったとある記事は、その約百年後の(4)において、善通曼荼羅両寺の〈薬師如来像ハ、渡唐ヲ欲スルノ時ニ、風波(の安全)ヲ祈ル為ニ、手ヅカラ斤斧ヲ操リ〉彫ったことになっているし、(6)の如く伝教大師のこととも関連して、真言天台両密教の宗祖が並んで渡海安全を祈ったことになってくる。あるいは、〈止住練行〉なる山林抖擻行も、古代仏教における高僧なれば、至極当然のことであったであろうはずだが、その聖跡も増えてゆく。〈土俗〉の口碑としての、七宝を埋めたり、念願石の伝説が生まれ、それが四百年後には、今日に存する善通寺の裏山に連なる五岳山の説明となり、さらにそれは類型的な記述の中でも(B)の個性的な釈迦湧現の、我拝師山の命名の所以になっている。しかも、その(B)の伝承も、(8)では単に〈釈迦ノ出ヅル寺〉

であって、大師との邂逅はない。名は「我拝師山」であるが、(11)ほどに詳しく説明されない。その三(B)は、『――行状図画』あたりが、もっとも最初の詳しい叙述ということになろう。真言僧の書承による創作が、少しずつ平凡な説話を誇張化奇瑞化していっているのである。善通曼荼羅両寺に、〈大師ノ御住房アリ〉とする記述も、当地が大師の生誕地であって(大師自身は故郷などに帰省することなどなかったであろうが、生誕地ならばその帰るべき)御住居のあったのは当然とした、後世伝承が添加されたものである。

このように、大師伝記伝説の中で、もっとも新しい分野に入る善通寺関連説話の醸成膨脹から推察すれば、『高野大師行状図画』の「善通寺額事」の一節も、これらと似た傾向を以て、大師伝記の書承過程の時の流れの中で、真言僧によって産み出されてきた、と考えられよう。この『高野大師行状図画』の善通寺書額伝承の源となっているのは、(2)『弘法大師行化記』であるが、殆ど変わりがないのは、その成立が二者とも比較的近いからともいえる。大師が善通寺を建立して、その額を書したが故に、その額の精霊が陰陽師安倍晴明を畏怖せしめて道を変えさせた、という伝説になるが、この書額有霊の伝承は突然に、十三世紀を迎えて始めて大師伝記伝説に登場してきたのは、如何なる理由からであろうか。

私が思うには、(2)に先行する百年前に、(1)に初登場した善通寺書額の記事などから、大師生誕地としての説明で終るべき善通寺周辺の地勢や土俗口碑などが、書承者である歴代真言僧の関心の抱かれるところとなり、現地を中心とした伝説が、善通寺の書額有霊の奇瑞譚に発展し膨脹した、と思われる。大師の筆なるが故に、四天王が守護したり、額に精霊があるという奇瑞は、他の大師伝記に古くからある名筆説話伝説(例えば、上述の「五筆勅号」「虚空書字」「大内書額」など)に影響されて生まれてきたものであろう。

大師の名筆伝説は、今日でも口碑にも見られるのだが、当代においても当初は恐らく伝記以外の口碑にあったもので、これが拡散して生誕地の善通寺の書額に結びついた、と考えられる。そうでなくとも、大師の先祖の寺として(三二ページ)あった地方小寺院が、大師の有名化とともに信仰が拡がり参詣者も増えてくれば、大師にまつわる当地伝説は当然に

数を増やしてくるのであり、（ウ）～（カ）の如き、土俗伝承を含めた遺跡や遺構は種々大師に仮託されてくるであろう。大師が生地の寺を建立したというような（ア）（イ）（イ'）の如き伝承など生まれてくるのは、極く自然なことで、これに大師伝説を語る時衆系念仏聖たちの流れを汲む中世高野聖が参与すれば、枝葉を拡げた伝説は、たちまちのうちに真言僧などに結びついてくるであろう。

善通寺掲額説話は、それより古い伝記伝承の大師名筆伝説に大いに影響されたもので、生誕地の善通寺の口碑が中央化した段階（後述第五節参照）で派生した説話といえよう。

※

もう一つ、善通寺掲額説話が、『弘法大師伝』全九十三種の多くの大師説話の中で、重要な地位を占めていない理由として、上述の（A）（B）の関連ある二つの説話の比較がある。（A）（B）は、それぞれ（1）～（12）の伝記中に登場してきて繰り返し書承された過程において、その発生もほゞ同じ時期の中世期といえるし、その書承口承の集密度も凡そ同じぐらいと考えられるが、一方（1）～（12）に含めなかった、大師伝記中のもっとも整った（凡ゆる大師説話の凡そを網羅している）と思われる代表的作品としての『高野大師行状図画』と『弘法大師行状記』の二本のみを比較した場合に、（A）は前者のみにしか掲載されないが、同じ善通寺に関連する我拝師山の命名の縁起ともいえる（B）は両者に語られている。すなわち、同じ善通寺説話であっても、（A）善通寺掲額説話は多くの名筆伝説の末端を担うもので、大師を喧伝する時にはさほど語られなかった（せいぜい地もとの善通寺あたりで語られる程度の）説話であり、『弘法大師行状記』にすら載せられなかったことになる。しかし、（B）の我拝師山命名由来譚というべき「釈尊湧現」説話は、大師の釈尊との邂逅の設定も必要だったとみえて（有名人との邂逅の網羅――三六ページ参照）、両者の二大絵伝に語られているのである。このことでも（A）（B）の二説話の軽重がはかられよう。

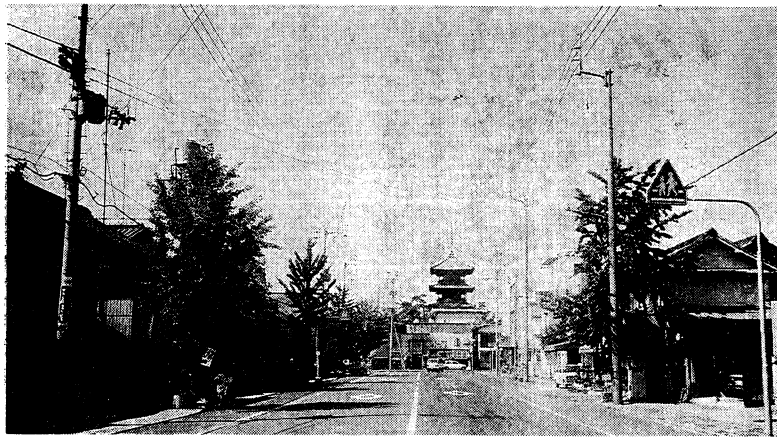
四、当地の口碑としての掲額説話

善通寺掲額説話が、大師の事跡として伝記には、後人（真言僧）によって、中世期に挿入されたらしい、という推測は、(1)〜(12)の文献などの比較的新しいものに表われ始めることで理会できるし、当説話の他の有名説話（例えば「五筆勅号」「三鈷投擲」など）に比べての、九十三種の伝記中の頻度からも成り立つところであろう。さらに、視点を変えて、当説話が当地の善通寺の伝承にあったらしいこと、すなわち当地の伝承が、大師生誕地である因縁から伝記に組み入れられたことも、考えられるところである。

当地の善通寺には、記録や伝記にはない弘法大師伝説が伝存している。善通寺掲額説話も、他の当地伝承の中の一つとしてあったものが、大師の同じような名筆伝説（例えば「大内書額」）など、中央にあったそれと類似したものを地もとで模倣して口碑として伝承されてきたものに、安倍晴明などのモチーフの如き趣向が添加されて、伝記中に移入され始めた…、といえるであろう。

例えば、善通寺の伽藍から南へ約百メートルばかり離れた地点に、玉泉院という阿弥陀如来を本尊とする坊がある（写真説明参照）。寿永年間（一一八二〜五）に西行法師も住みついていたという一名西行庵と称する小さな堂であるが、その名の玉泉の如く、本院の片隅に井戸があって弘法大師が開掘したものと伝承する。口碑としての「弘法清水」に類似するそれは、地もとでは殆ど聞かれないが、門札には「屏風浦西国第十三番霊場　弘法大師御開掘玉之泉　西行法師惜別久の松旧蹟　善通寺玉泉院」とあって、それが口碑にもっとも多い「弘法清水」の一類であることを謳っている。しかし、善通寺掲額説話に伴っての、この弘法清水に関する伝説は、伝記には全く記されていない。

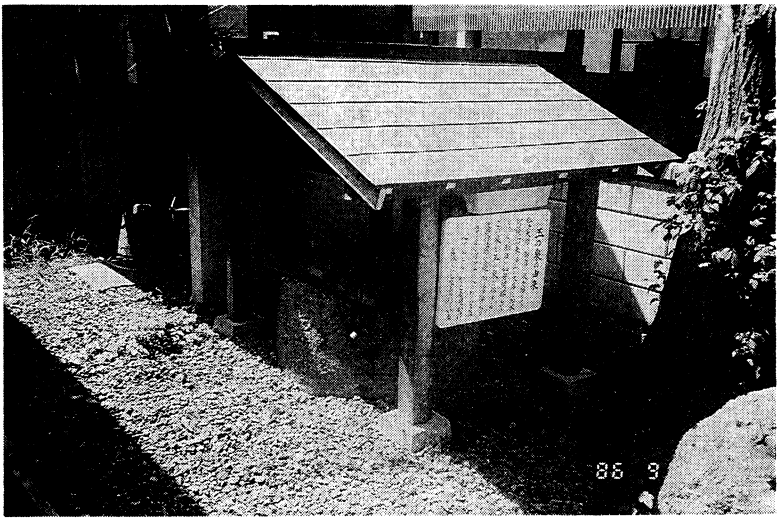
「弘法清水」は、自然説明型伝説の中では、全伝説中もっともその数が多く、その内容は凡そは蘇民将来型をもり込ん



写真説明：善通寺市の玉泉院（弘法井）の前あたりより善通寺の五重塔を望む。（昭61.9.11筆者撮影）

だもので、全国のあらゆる僻地山村にも採集できるものである。恐らく、善通寺周辺にも、井戸や水に不自由な時代には大師にまつわってのこの種の伝説は数多く存したに違いなく、その一つがこの玉泉院の発祥の縁起として、大師御開掘として今日にその名を存した、と思われるのである。

今日の民間口碑にもっとも数多く大師と結びついた清水（湧水）や井戸の伝説が存するに拘らず、九十三種の伝記中には、大師と水を関連づけるものは他の奇瑞譚に比べて、相対的に少ない。伝記中の説話は『弘法大師行状記』や『高野大師行状図画』の如く、凡そすべてを網羅するものでも一〇〇種前後であるのだが、湧水類に関するものでは、岩に緑樹を香水を以て生やす「灑水生樹」、槇尾寺その他に湧水を生ぜしむる「濁水手水」「竜泉湧出」、旱魃に雨を降らす「神泉祈雨」ぐらいのもので、純粋に口碑に似た湧水譚は「竜泉湧出」など、一種ということになろう。これが、伝記中の相対的な数の少なさと重なって口碑には最高の数を有するというのは、庶民生活が非常に水に不自由をした時代であって、大師の徳を以て自己教団の版図（納骨信仰を拡大した高野山）を拡げようとした先導師の類の人々が、これを大師に結びつけたからであろう。これらの類の人々は時宗系念仏聖の性格を有する高野聖であった…、という



写真説明：善通寺市に存在する弘法大師開掘を伝える弘法井の「玉の泉」
（昭61.9.11筆者撮影）

ことを以前に論じている(注1)。善通寺にある玉泉院の玉泉なる大師開掘の井戸もこれに洩れぬものであったろう。否、善通寺掲額説話も彼らの手によって、中世期の大師伝の中に伝えられ真言僧において挿入されたことも考えてよいであろう。

地方民間口碑において、大師を主人公とする類としては、湧水に関する伝説ほどの数の多さはないが、その名筆や硯に関するものも少しはある。湧水伝説が生活のためではなく、大師の硯水のためとする類似のパターンもある。大師の筆跡と伝えるものはもちろん、大師が墨をすったという硯石(岩)、仏の徳を書いたという石、あるいは筆清水の名を持つ湧水などなど、凡そは類型の多い、全国に拡がって拾われる型で、大師の名筆は中世期以降においては相当に喧伝されていたことが推察される。

そして、善通寺の今日においては、玉泉院に関する弘法水伝説と、名筆では伝記中にある掲額説話という型で、辛うじて伝存しているわけだが、これらとて他地方にある類型伝説と共通する内容からして、必ずしも善通寺のみに大師が来訪してその事跡を印したとはいえないことになる。むしろ、こ

の伝存した伝説のみではなく、大師伝説は善通寺周辺には、もっと数多く類型的なものがあったはずで、そのほとんどが時代的合理性に叶わずに、消滅してしまったであろうことが推察される。非常の多くの伝説が、生誕に関するものを始めとして存在していたことが推察され、その中でももっとも有名で数の多い弘法水伝説である玉泉院が、その玉泉の名とともに残ったのであろう。多くの一つ一つの伝説の中で、弘法水についでもっとも類型的な掲額説話も、その喧伝化された名筆によって伝記中に存在することになったのであろう。いわば、当地の弘法大師伝説の多くの中で、残った末端の伝説の一つが、これらであったと推測できる。換言するなら、善通寺掲額説話は、地もと口碑からたまたま採用された伝説が、伝記中に文献に残った…、といえるであろう。

五、晴明伝承に担われた掲額説話

しからば、玉泉院の名を担う弘法井の伝説は、伝記中に採られずに、なぜ善通寺掲額説話のみが、我師拝山釈尊邂逅説話と併用して、真言僧の伝記中に採用されたか…、ということになる。

玉泉院伝説は、口碑に多い弘法井伝説の一種であるから、この類は近世以降の非常に新しいものであった、と考える。しかもこれに類似する説話は、伝記中には上述の如く「竜泉湧出」なる河内国竜泉寺の類型があって、既に中世期の弘法井伝説は存在しているのであって、単に大師が来訪して泉を湧かせたという単純な型は、近世期に入って高野山真言僧の耳に届いたとしても、さほど珍しいものではなかったであろう。これに比して、同じ善通寺周辺における伝説でも、掲額説話はちゃんと『――行状図画』に登場する中世期伝承であるし、当説話に登場する安倍晴明によって、この伝説の担い手が真言僧に持ちこんだ経緯も、ある程度の推察が可能なのである。

要は、この掲額説話の担い手による、中世期の有名性とか、あるいは語られた頻度性ということになろうか。すなわ

ち、安倍晴明を語ることは、多分に高野山の時宗系念仏聖の介入を考えさせしめる示唆を与えてくれる。庶民化してゆく時宗系の高野聖の俗人化、すなわち高野山の中世期以降におけるアジール化への過程、参詣者を勧誘した納骨信仰による増収化政策と関連を持っていたように思われる。高野聖は、この高野山の中世期の流れに呼応して生まれてきたもので、半僧半俗の下級僧侶として膨脹し、その中には詐偽まがいの弘法大師の灰といって商いをした「護摩の灰」を始め、行商本位の「呉服聖」や、宿を強要する「宿借聖（やどかり）（夜道怪（やどかい））」など、一般民に毛嫌いされる者も少なくなかった。しかし、もろ刃の剣としての彼らによる下界の下層者との交流はすゝみ、全国的納骨信仰も栄えてゆく。一方、安倍晴明を語るその担い手としての唱門師・下級神人・下級陰陽師の徒の接点も、この掲額説話からは考えられるところであって、掲額説話が中世期以降のものであるだけに、下級僧の高野聖を媒介として高野山の真言僧に渡ったことも、考えられてよいところであろう。

そもそも、安倍晴明とは歴史辞典における記録からの記述においても、伝奇的性格を具えた人物である。髪梳きや爪切りの凡ての日茶常飯事から天下の祭儀に到るまで、何事においても陰陽に事を託した平安中期の天文博士として、その伝奇的性格を併せて、後世においては第一の陰陽家の名声と崇拝を以て、今日にその名を伝えている。そして、彼にまつわる多くの神秘的な説話（上述の『今昔物語集』『古事談』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『平家物語』『元亨釈書』その他）は、さらに彼を伝承的性格の人物とさせている。

その伝承的性格をもっとも強く具備していると思われる説話が、「信太妻」で有名な、彼の母親を狐とした狐化生伝説である。安倍晴明が、狐との混血児という伝承は多分に下級陰陽師の始祖伝承として伝えられた、憑き物の家に由緒を縁起づけるそれに類似している、と推測される。

「信太妻」の説話とは、説経節に語り伝えられ浄瑠璃や歌舞伎に劇化され膾炙したものだが、和泉国信太山の森に棲む狐が安倍保名と契り、晴明を生み残して、「……信太の森のうらみ葛の葉」の和歌を泳んで山に姿を消す、という粗筋で

ある。この伝承の生まれた地は、大阪の四天王寺から熊野に通ずる熊野街道沿いの、今月の和泉市(旧信太村←南王子村)にあって、当地に祀られた聖神社に伝わる、狐が畜生を解脱して神に転生する本地譚としてあったもの、と思われている。そして、この伝承を聖神社に管理してきた層は、聖神社に奉仕する下級神人（唱門師）たちと考えられ(注4)説話中の主人公となる安倍の姓は、この街道沿いの四天王寺と信太村（和泉市）の間に存在する旧安倍野村の唱門師たちとの下級層の彼らの交流において、説話中に化合されたと考えられる(注4)。事実、安倍野村にも信太村に類似する安倍晴明を遠祖と称した唱門師の一群が住んでいた痕跡がみえ、下級陰陽師の自尊心を充たしていたであろうことは推測されるし、信太村の方にも「信太妻」を語ることにおいて晴明を遠祖とする下級神人たちがあって、彼らが同じ血族団体として深く結びついていたことは、想像に難くない。彼らの中には、中世期高野山の納骨信仰において高野聖の多く輩出されたことも、容易に推測されるところである。この熊野街道は南に下って和歌山市で左に折れて紀の川を溯れば、高野山への道であって、時宗系念仏聖の中世高野聖が頻繁に往反していたことも確実であろう。被差別層との接触も濃かった下級僧侶の高野聖たちが、安倍晴明の名をこのあたりから高野山に持ち込んだことも、推察は可能である。問題は安倍晴明という陰陽師の代表者たるモチーフが、善通寺の説話の中にどうして混入されたか…という点である。これも、大胆な想像をすれば、下級陰陽師や散所民の口碑が、善通寺周辺に伝承されていたと考えられよう。

善通寺掲額説話において、安倍晴明が突如として表われ（突如として表われる有名な宗教人は、大師伝記においては数が多くとりたてて珍しくはないのだが…）、掲額の威光で道を換えなければならなかった伝承は、唱門師たちの伝承が善通寺の口碑にまつわって馴化され、それが下級神人たちから下級僧の高野聖に移されて、高野山に入って大師伝記の中に一説話として成立してきたように思われる。善通寺掲額説話は、同じ玉泉院の伝説とともに地もとにあった善通寺周辺の口碑でありながら、掲額説話の方のみ伝記中に採用されたのは、多分に玉泉院弘法井の伝説の方が新しく、掲額説話の方が安倍晴明伝承に負うて中世期に運ばれた可能性があり、被差別層に多かった下級僧がこの伝承の担い手としてあった

と、推察できるのではあるまいか。

六、むすびに

大師伝記には、第三節に述べた如く、名筆説話が多く収載されている。その中でも「大内書額」は掲額説話として人口に膾炙しているものである。これは、俗に「弘法（大師）抛筆」といわれるもので、勅命によって応天門に掲額する字を書き、〈…額うち付けて後見たまひければ、応の字の上の円点かき落されける程に、筆をなげあげて点をうたれけり（『弘法大師行状記』巻五）〉という有名な説話である。その他にも宮中の門に関わる説話としては「皇嘉門額」などという類似伝承もあって、大師にまつわる有名な名所などの伝説伝承などは、伝記に採用されなくとも、全国に少なくなく存在していたことが、推察される。善通寺掲額説話もその一つであって、口碑としてあるものが、たまたま中世期において数多い大師伝記の中に採りあげられたから残ったのであって、偽筆ばかりの中で（平安前期の大師真筆が風雨にさらされて中世期まで残っているわけはないのであって…）、その内の少し筆ぶりが達者であれば、大師筆と化してしまったものも、少なくなかったはずである。弘法伝説の拡がりを考えれば、高野聖たちの口が、凡てを大師真筆と化したことは、容易であったし、これを受容する口碑の担い手である一般側の中近世の書道家家元制度の喧々たる連中(注5)や一般信者にしても、この伝承は地もとの光栄としてのりやすいものであったろう。

たまたま、善通寺は大師生誕の地でもあり、大師にまつわる口碑は上述の玉泉院のみならず、産湯（うぶゆ）の水や幼年時代の砂遊び（童雅奇異）の地など、多くの伝記との関わりから創作できることも可能であったから、豊富な口碑が存在していたと推察され、当然に名筆に因んだ掲額説話も、後に成立してくるのは自然のなりゆきでもあった。たゞ、善通寺掲額説話が大師伝記の古いものから伝承されている抛筆伝説（大内書額）と異なって、中世期に到って伝記中に登場し始めたとこ

ろに、多分に後世の創作性が考えられねばならない。特に、その思いつき的な掲額説話であることは、この（A）説話が『高野大師行状図画』に語られながら、もう一つの大師説話を網羅していると思われる中世期の大師伝記代表作品である『弘法大師行状記』には存在していないことである。すなわち、当代に多くあった口碑としての掲額説話の一つが、たまたま有名な抛筆説話（大内書額）などに引き曳られて、大師伝中に創られてきたことは感覚として納得できはすまいか…。それは、他の邂逅奇瑞譚の多い大師伝記から考えて、（B）の地もと伝承としても我師拝山釈尊湧現説話にも感じられるところである。

すなわち、九十三種の多き大師伝記の中で、枝葉を生やし数を増してきた多くの奇瑞譚の末端が善通寺掲額説話である、といえる。そして、これを伝えた生誕池の地もとの口碑に、これらの内容を運び手としての高野聖などの下級僧や被差別散所民たちの参与が、安倍晴明などのモチーフを加えさせて、歴代の高野山中の真言僧によってさらに、有名人にくまなく関連している大師像が、重ねてまたまたここに創りあげられた、と考えてみることができる。

（注1）渡邊昭五「弘法絵伝の絵解き説話と伝説」（「就実語文」3号・昭57）
渡邊昭五「弘法大師の伝説」（「説話文学研究」20号・昭60）
渡邊昭五「絵解きと弘法大師絵伝」（『一冊の講座絵解き』所収・有精堂・昭60）
渡邊昭五「大師の伝記伝説と民間口碑」（『弘法大師信仰』所収・雄山閣・昭63）
（注2）渡辺昭五「稲荷信仰と弘法伝説」（「朱」30号・昭61）
（注3）善通寺市企画課『善通寺市史』第一巻（昭52・善通寺市）
（注4）盛田嘉徳『中世賤民と雑芸能の研究』（雄山閣・昭49）
渡辺昭五「狐とお稲荷さん――その二」（「朱」33号・平1）
（注5）渡辺昭五「弘法大師名筆伝説の行方」（「大妻国文」27号・平8）七七ページ
弘法大師が名筆家であるとした伝承は……（中略）……家元制度に喧々とする書道家たちが培った話題であったように、考え

る。……寛永三筆の松花堂昭乗は大師の筆を崇敬し、自分も大師の筆跡を模倣し、大師流なる派を拓いたという。これなど大師名筆を信じた者の伝承が事実に変えられた例だと思う……（以下略）……